

烏森の魔女ゲーム 〈第 1ゲーム〉

海神アクアマリン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

烏森と呼ばれた深い森の土地にある屋敷で繰り広げられる殺人事件をゲームとした魔女との戦い。

姿なき魔女に勝つことが出来るのだろうか。

終わらない殺人の悪夢が始まる。

目次

第1話	1
第2話	5
第3話	9
第4話	13
第5話	17
第1のお茶会	24

第1話

1986年六軒島で起きた「六軒島大量殺人事件」

あれから20年が経った2006年に黒野という土地で魔女とのゲームが始まろうとしている。

「いいね。家がバスを所持してるのは最高だね。」

私は南野優妃。今日は年に一回の親族会議日で、南野家の人間がお屋敷に集まる日だ。

南野家はかなりのお金持ちでみんな裕福な暮らしをしている。その中でもお祖父様は莫大な財産を隠し持っていて、昔に一度だけお祖父様が所持している白金と黄金と宝石を少しだけ見せて証拠を提示した。その時見せられたものだけでも数百万の価値があるらしい、だからお祖父様の遺産を狙う親族は少なくない。

「お屋敷が山奥にあるなんて行くだけで大変よ。」

序列4位でお祖父様の長女の紫音おばさんだ。とても頭が良く、密かに次期当主の座を狙っている。

「でも、お屋敷に簡単に行けないのは防犯にも繋がるんじゃないかしら。」

序列5位でお祖父様の次女の優香おばさんだ。密かに次期当主の座を狙う紫音おばさんの陰から次期当主の座を狙っている人だ。

「優香の言う通りだ。こんだけ遠くて複雑な道なら変な奴はやつて来ねえぜ。」
序列3位のお祖父様の次男で私のお父様の相馬ですね。私の尊敬する人で一期次期当主の座を手にするかもしれないと噂になる程の実力者だ。

今回の親族会議の参加者は先程出てきた私を含める四人と序列1位源蔵お祖父様、序列2位秋楽おじさん、序列6位いとこの芽亜里、序列8位いとこの薫お兄ちゃん、序列9位いとこの奏太、序列10位いとこの莉亜、序列11位莉亜の双子の妹の芽琉、序列12位春香おばさん、序列13位お母様の彩芽、序列14位蓮司おじさん、序列15位城助おじさんの15人が参加する。ちなみに私は序列7位。

それ以外に使用人が8人いる。

合計して23人がお屋敷に集まることになる。

「皆様、もうすぐお屋敷に到着いたします。」

運転してくれているのは使用人の安藤美代子さんだ。27歳の女性で運転以外は苦手で、それ以外の仕事を他の使用人に任せているらしい。

森を抜けると南野邸が姿を現わす。お祖父様の前の当主が原因で傾いた家が復興し始めた時に建てられたらしい。かなりの豪邸で大きな庭と花畑があるのが特徴だ。

このお屋敷を舞台に恐ろしいゲームが始まろうとしていることなど誰も知る由はなく、誰にもゲームの開始を止めることは許されない。

「よお、久しぶり。優妃、4年ぶりだな。」

バスを降りるといこの芽亜里が出迎えてくれた。

「お久しぶりですね。芽亜里は4年前より女性らしさが減ったように見えて残念だわ。」

「喧嘩売ってるのか？まあ、元男子のくせに女性らしいお前には負けるよ。」

私には特殊な精神病を持っていて、体は男性で心は女性というもので3年前に手術を終えて女性として生きることにした。

「お前が元男子なんて周りに言ったらすぐく驚かれるだろ。こんな綺麗な人が元男なんて信じられないってくらいにな。」

「そんな事より、あそこにあんな物あったっけ？」

私が指差す方向には森にたたずむ女性の銅像が存在した。

「ああ、あれは2年前に祖父様が建てさせた魔女の銅像だ。お前も知ってるだろ。昔烏森と呼ばれていた黒野の森にある噂を。新月と月食の時に本気を出せる黒月の魔女の噂だよ。」

私はその噂をよく知っていた。魔女や魔術にいまだにハマっている私はあらゆる方法で身近な魔女である黒月の魔女について調べた。特殊な魔法陣、使うことのできる魔法、ありとあらゆる物を調べ上げて記憶した。

「きやふふふ。黒月の魔女クロノエル、特殊な魔法陣を駆使して不可能を可能とする大魔女。」

「どうしたんだよ。優妃、なんかおかしいぜ。」

「おかしくないよ。魔女の話になると人が変わったように熱心に怖いくらいに詳しく話してくれるんだ。」

薫お兄ちゃんはいとこの中で一番年上で私のことをもつとも理解してくれていて、私にとって一番怖い人だ。私を理解しているからこそ簡単に私の考えが分かっただろう。

これから始まるゲームは命がけのゲーム、終わることの無い悪夢の開催宣言はただ少し先だ。

第2話

私達はお屋敷に入った。お屋敷に入ると使用人とお祖父様と長男一家が出迎えてくれた。

「おお。君は優妃ちゃんかね。随分と綺麗になったね。娘の芽亜里にも少しは見習ってほしいものだよ。」

「今その話をしなくてもいいだろ。」

芽亜里のお父さんの秋楽おじさんは私がすごく苦手とする人だ。私を理解する薫お兄ちゃんと違って、偉そうで次期当主は自分だと決めつけているからこのタイプ苦手だ。

「おお。我が子達と孫達よ。よく来たな。ゆつくりしていつてくれ。」

この家を復興させた凄腕のやりて、現当主の源蔵お祖父様。自分の子供より孫に愛を注ぎ、孫と仲良くなるために魔術や他の孫の趣味を知ろうとしてくれるいいお祖父様だ。

少しエントランスで話してから客間に移動した。荷物は使用人にお屋敷から少し離れたゲストハウスに運んでもらった。それから私達孫組は大人の邪魔をしないよ

うに配慮して使用人の神威君と美紅利ちゃんと一緒にお屋敷の裏にある花畑に行った。

「それにしても大きなお花畑ね。こんなのを完成させるには時間がかかったでしょうね。」

「いや、優妃。考えてみるよ。あの祖父様だけ。花を大量に買って毎年立派なのを作るようにしてるんだよ。」

だと思つたわよ。地道に育てたら4年でこんなに広い土地を埋め尽くす花畑が出来るわけがないもの。

「そういえば、鳥の鳴き声がしないね。」

「ホントだ。鳴き声がしないね。」

「確かに莉亜ちゃんと芽琉ちゃんが言う通りだ。」

この黒野の森には昔から沢山の鳥が住んでいて南野家の人間は鳥と共存していた。沢山の鳥が住んでいるからこの森は鳥森と呼ばれ、人々が恐れる場所となっていた。

「鳥が居ないなんて不吉だわ。」

「優妃の言う通りだ。確かに不吉だ。なんか怖いぜ。」

「芽亜里お嬢様大丈夫ですか？」

「ああ。一応大丈夫だぜ。神威君。」

そろそろ中に戻ろうと言う話しになり私達はお屋敷に戻った。お屋敷でテレビを見て分かったことだけど、どうやら台風がすぐ近くまで迫っていたようだ。もう少しニュースを観ようと、この時思ったわ。

あれから数時間経過して夕食の時間になり、食堂に移動して夕食を食べることになった。

「うわあ。相変わらず豪華ね。4年と変わらず豪華だなんて驚くわ。」

出てきた料理は全て元料理人の桐崎剛座さんが作ってくれている。

「今日はいつもより豪華だよ。4年ぶりに来てくれた優妃ちゃんのためだからね。」

「秋楽の言う通りだ。今日は優妃を歓迎するために高級食材集めて作らせたのだ。どんどん食べなさい。」

「ありがとうございます。秋楽おじさん。お祖父様。」

豪華な食事をみんなが食べ終わった瞬間に双子の莉亜と芽琉が話し始めた。

「みんな食べ終わったみたいだね。」

「それじゃあ、手紙を莉亜に読んでもらおうね。」

二人が突然そんなことを言ったからみんな固まってしまった。

「それじゃあ、私が読むね。」

『親愛なる南野家の皆様、初めまして。南野家当主の源蔵様に仕えております黒月の魔女クロノエルと申します。今回は源蔵様にお貸した白金や黄金などを全て返していただくためにお手紙を差し上げました。なお、源蔵様との契約によりお返しいただくのと同時に利子として南野家の全てをいただきます。しかし、皆様が私の肖像画の側にある碑文の謎を解けたならこの権利を放棄します。私と源蔵の謎を解けるか知恵比べをお楽しみください。』

ついに魔女のゲームの開催宣言が言い渡された。恐怖はこれから始まる。終わらぬ悪夢の始まりだ。

第3話

突然の魔女からの手紙に一同は固まっていた。しかし、秋楽おじさんが声を荒げた。

「どう言うことだ。どうしてこのような手紙が読まれたのだ。」

「落ち着け、秋楽。これは紛れもなく私とクロノエルが契約を終了された証だ。現に私は当主の指輪をしていない。」

確かにお祖父様は右手の中指に当主の指輪をしていなかった。当主の間は絶対に外さないと言っていた指輪が外されたということは、お祖父様が当主の権利を手放したということだ。本当にクロノエルに渡してしまった可能性もある。

それについてお祖父様が語った。

「私は先代が傾けた家を復興させるために魔女と契約をして7トンの黄金と5トンの白金、そして沢山の宝石を貸し与えてもらった。契約内容に関してはクロノエルとの契約で言えんがな。この魔女からの手紙には碑文の謎を解けば全ての権利を放棄するとあっただろう。つまり、私は謎を解いた者を時期当主にするつもりだ。」

お祖父様の言ったことは誰もが理解できた。しかし、魔女の碑文は何人もの人が

挑戦しても解けないほどの難解な物だった。

「お祖父様、碑文を解くのに時間制限はあるのですか？」

「それはクロノエルしか分からないことだ。みんな解く気になったようだから私は書齋に戻らせてもらうよ。」

そう言ってお祖父様はゆっくりとした足取りで食堂を後にした。

「親父も居なくなつたし、大人は大人で挑戦するから子供はゲストハウスに行きな。」

「分かつたわ。お休みなさい、お父様。」

「ああ。ゆっくり休めよ。優妃。」

魔女から挑戦を受けることにしてから、お祖父様と大人と子供はバラバラになつた。私は思った。

『魔女を馬鹿にする者には勝ち目のないゲーム』だと思つた。

私達はゲストハウスに着くといとこ部屋で碑文の謎に挑戦することにした。

「誰か碑文の内容を覚えていないかな？」

「薫お兄ちゃん、莉亜がメモってるよ。莉亜、偉いでしょう。」

「うん。莉亜は偉いね。優妃お姉ちゃんが頭撫でてあげましょうか？」

「うふふ、ありがとう。優妃お姉ちゃん。」

姉が妹の頭を撫でるような感じで、兄妹のいない私からしたら本当の妹のように感じた。

「さて、碑文をよく見ると物騒なところがあるね。」

「薫兄さんが言ってるのって、魔女の儀式のところか？」

『第1の生贄に偉大なる者の心臓を抜きて燃やし捧げよ。第2の生贄に対になる者が選びし者を捧げよ。第3の生贄に腹を切られし者を捧げよ。第4の生贄に手足を外されし者を捧げよ。第5の生贄に額を貫かれし者を捧げよ。第6の生贄に杭を打ち捧げよ。第7の生贄に首を落とされしものを捧げよ。第8の生贄に血を抜かれし者を捧げよ。第9の生贄に魔女への手向けに6人を捧げよ。そして魔女は復活する。』

「兄貴、これだと軽く見積もっても14人は色々な方法で殺されることになるぜ。」

奏太の言う通りだ。この儀式には大人数の生贄が必要になる。それにこれだけ多彩な殺し方だと、凶器は一種類では不可能だ。もしも、この儀式を行うなら親族会議は最高のタイミングだ。通常ならこのお屋敷には13人しか居ないわけだから少し人数が足りない。

「何度見てもこの部分だけでも分からないわね。」

「今日はもう寝よう。頭を使い過ぎて気づかなかつたが、もう11時だ。」

「仕方ねえ。今日はこれで切り上げるしか無いな。」
こうして謎解きは中断されて全員が寝ることになった。
ついに始まったゲーム。本番はこれから始まるのだ。

第4話

私達は5時に起きた。何故か外が騒がしいから目覚めてしまった。外は台風で大雨が降っている。一体何が起きたと言うのだろうか。

「外が騒がしいわね。」

「何かあったのかもしれない。莉亜ちゃんと芽琉ちゃんはここにいて、僕と芽亜里と優妃と奏太で様子を見てくる。」

私達四人は素早く着替えて部屋を飛び出した。

ゲストハウスの近くにある薔薇庭園の真ん中の建物に大人が集まっているに気づいて近づいた。近づいて見ると目を疑いたくなるような光景が広がった。

お祖父様と秋楽おじさんの妻の春香おばさん、そして莉亜と芽琉の母親の優香おばさんの死体があった。

『お祖父様は胸を切り裂かれていて心臓を抜かれていた。その心臓は3人の死体の真ん中でお皿に乗せられて燃やされていた。』

『春香おばさんは頭の二箇所を鈍器で殴られて殺されていた。』

『優香おばさんはお腹を切られていた。それだけでは無く、内臓をかき回されて

グチャグチャにされていた。』

3人とも無残に殺された。お祖父様の死にみんなが涙し、春香おばさんの死に秋楽おじさんと芽亜里が涙し、優香おばさんの死に兄妹が涙した。そんな状況で泣かない人間がいる方がおかしい。

死体は医師免許を持つ私の母の彩芽が検死した。まあ、検死するまでも無く、死んでいるのは一目瞭然なのだが一応検死するらしい。

検死も終わり、ひと段落ついてゲストハウスに移動することになった。

「ここに全員が集まっていれば安全だろう。」

「秋楽兄さん、3人の死体をあのままにするのは可哀想だわ。」

「紫音、悪いがあのままにするしか無いんだ。現場保存しないと警察が捜査出来ないからね。」

秋楽おじさんの言う通りだ。今遺体に何かをするのは得策では無い。

「それにしても犯人はどこにいるのだろうか。それとも、僕たちの中にいるのだろうか。」

「薫お兄ちゃん、何を言ってるの？きやふふふ。これは魔女の仕業だよ。」

『被害者全員の部屋は施錠されていて密室だった。お祖父様以外は二人づつで寝ているから一緒に居た人間が犯人かもしれない。でも、それは不可能。それだと共犯が

いることになるけど、3人の寝床には血痕が無い。それは使用人にここにくる間に確認したから間違いない。したがって、部屋での犯行はありえないから複数の犯人がいて運んだと言うのは無理がある。だからこそ、魔女が魔法でやったことになるよ。』

私が一気に話し終えて周りを見ると、莉亜と芽琉以外の人間は全員固まっていた。無理もない、魔女の犯行の可能性を私が証言してしまったのだから。

少しして秋楽おじさんが言った。

「ゲストハウスには食料も武器もない、この台風で電話も繋がらない、このまま犯人に殺される可能性もある。だから、お屋敷に戻って食料と武器を取りに行きたいと思う。」

「それなら俺と兄貴と蓮司さんと城助さんの四人で行こう。大人の男四人なら犯人も簡単には殺せないはずだ。」

「相馬さんの意見に賛成です。」

「城助さんに同じで賛成。」

そうして四人がゲストハウスを離れた。まだ午前8時だが、あまり食事を取らずにいて犯人に襲われた時に動けないと困るから、秋楽おじさん達の行動は正解だとゲストハウスに残った人間も思っただろう。

「きししし、無駄だよ。クロノエルの前では武器なんて役に立たないよ。芽琉。」

「くふふふ、そうだね。クロノエルに武器は使えないね。莉亜。」

私と同じで魔女を信じる2人と私の考えは同じだ。あらゆる魔法を使えるクロノエルにはただの武器は何の役にも立たない。2人と同じで私も無駄だと思った。

「すみません。おトイレに行ってきます。」

「私も行くぜ。優妃。」

「優妃お姉ちゃん、莉亜と芽琉も行くよ。」

そして、4人で部屋を出た。

姿なき魔女の殺人が始まった。黒月の魔女から生きて帰ることは出来るのだろうか？

魔女のゲームは終わりへと向かう。タイムリミットは誰にも分からない。終わりとは一体何なのだろうか？

第5話

お父様達が出て行ってから1時間と少しの時間が経った。まだお父様達が戻って来ないのは流石におかしいと、体調を崩した紫音おばさんとお母様と使用人6人を残して、私と芽亜里と薫と奏太と莉亜と芽琉と使用人の露御寺隼人さんと桐崎剛座さんでお屋敷の様子を確認しに行くことになった。

ゲストハウスを出て5分ほど歩くとお屋敷に着いた。

「あれ、おかしいですね。鍵も閉めないなんて無用心ですね。」

剛座さんの言う通りだ。確かにおかしい。犯人が潜んでいる可能性を考えているなら鍵を閉めないことはあり得ないことだ。

「剛座、私と一緒に先を歩くぞ。お嬢様達を護衛するぞ。」

「かしこまりました。お嬢様達には指一本触れさせません。」

使用人2人を先頭に近くにある客間を調べることにした。客間の扉の前に立つと中から生臭い匂いがした。私達は嫌な予感がした。

隼人さんが警戒しながら扉を開けると中にはお父様達の死体があった。4人もひどい状態だった。

『秋楽おじさんは手足を切り落とされて殺された。』

『お父様は首を切り落とされて殺された。』

『蓮司おじさんは杭のような太いもので心臓を貫かれて殺された。』

『城助おじさんは額に穴を開けられて殺された。』

全員の死体が別々の殺し方で最悪な状況だった。よく周りを見るとテーブルの上にお祖父様のコレクションの実弾を発射できる銃があった。どうやら何者かに襲われてここに逃げ込んで殺されたようだ。しかし、この部屋も密室の状態だった。

「一体どうやって旦那様達を殺したというんだ。」

「剛座、今はそれを気にしている暇はない。そこにある銃を持って。すぐにゲストハウスに戻るぞ。」

「かしこまりました。すぐに行きましょう。」

鍵の開いていたお屋敷の扉、4人死体のある密室、これは絶対に次の殺人が起ころ。だとすると武器を所持出来るこちらではなく、病人もいて身動きのできないあちらを狙うのが普通だ。銃を持った隼人さんと剛座さんを筆頭にゲストハウスに向かった。

ゲストハウスに入るとすぐ静かだった。あれだけの人間がいて静かなのは絶対におかしい。そう思ってみんなが居るはずの客間に入ると8人の死体があった。

『紫音おばさんは部屋の一番奥で全身を穴だらけされて血を抜かれて殺された。』

『神威は胸を貫かれて殺された。』

『美紅利は胸を貫かれて殺された。』

『弥勒は胸を貫かれて殺された。』

『業は胸を貫かれて殺された。』

『照間清美は胸を貫かれて殺された。』

『安藤美代子は胸を貫かれて殺された。』

『お母様はお腹に穴を開けられて殺された。』

「一体何があったと言うんだ。」

「こんなのやつぱりおかしいぜ。」

「薫お兄ちゃんと芽亜里の言う通り、不可能な犯罪が起こってる。この部屋は私が出て行く前にドアノブに魔除けのお守りをしたから魔女も悪魔も入れないはずなのに。」

人間も入れない、魔女や悪魔も入れない、鍵の閉まった密室による殺人。

「おい、みんな隼人さんと剛座さんが居ねえぞ。」

「きつとお屋敷の方よ。莉亜、芽琉、芽亜里、薫お兄ちゃん、奏太、早く追いかけるわよ。」

そう言って再びお屋敷に行くことになった。

お屋敷の扉は相変わらず鍵をかけられていなかった。エントランスから少し進むと、大きな絵画の前に着いた。今まで気付かなかったがその絵画には黒月の魔女クロノエルが描かれていた。その絵画の反対側の壁の側に隼人さんと剛座さんが倒れていた。近づいて見ると2人は死んでいた。側には魔女からの手紙があった、

『隼人さんは頭を撃ち抜かれて殺された。』

『剛座さんは頭を撃ち抜かれて殺された。』

「なんて酷いことをこの人達まで殺すなんて。」

「おい、優妃と莉亜と芽琉。何をやってるんだぜ。」

薫が振り返るとそこには姿を変えた3人が立っていた。

「何かの冗談だろ。その姿、まるで魔女じゃないか。」

「ふざけたことをしているとブン殴るぞ。」

私達は黒月の魔女の絵画の前で笑った。

「黒月の魔女クロノエル様。ご生誕おめでとうございます。」

「黒月の魔女クロノエル様の弟子として心よりお祝いたします。」

「莉亜、芽琉、よくやってくれたわ。感謝する。後で褒美を与えるわ。」

「我らにはもったいないお言葉。」

「ありがとうございます。」

薫達は訳がわからないと言う顔をしていた。それもそうだ。魔女が目の前で話して居るのだからね。

「優妃、君は一体何者なんだ。」

「薫お兄ちゃん、私は6年前にクロノエル様の弟子になって、ちょうど今年旅立つから魔女の地位を譲ると言われたの。だから、私が魔女になるための儀式を行なった。そして、儀式を終えた私は黒月の魔女クロノエルとなったのよ。そう、これで私の勝ちよ。」

その後、9月7日から8日の間に起こった事件を警察が捜査した。警察は捜査の途中で当主の部屋から事件の詳細が書かれた文章を発見した。それはまるで1つの小説のようだった。それは警察の手により一部が公開される形となった。この事件は後に「烏森大量殺人事件」と呼ばれるようになった。

『南野源蔵。第1の生贄として死亡。』

『南野秋楽。第4の生贄として死亡。』

『南野相馬。第7の生贄として死亡。』

『南野紫音。第8の生贄として死亡。』

『南野優香。第3の生贄として死亡。』

『南野芽亜里。魔女の生贄として死亡。』

『南野優妃。魔女として行方不明。』

『南野薫。魔女の生贄として死亡。』

『南野奏太。魔女の生贄として死亡。』

『南野莉亜。魔女の弟子として行方不明。』

『南野芽琉。魔女の弟子として行方不明。』

『南野春香。第2の生贄として死亡。』

『南野彩芽。魔女の生贄として死亡。』

『南野蓮司。第6の生贄として死亡。』

『南野城助。第5の生贄として死亡。』

『露御寺隼人。魔女の生贄として死亡。』

『桐崎剛座。魔女の生贄として死亡。』

『神威。第9の生贄として死亡。』

『美紅利。第9の生贄として死亡。』

『弥勒。第9の生贄として死亡。』

『業。第9の生贄として死亡。』

『照間清美。第9の生贄として死亡。』

『安藤美代子。第9の生贄として死亡。』

烏森の魔女ゲーム。生き残れたもの無し。

第1のお茶会

「起きて、起きてっば。」

僕が目覚めると見覚えのない部屋にいた。周りを見ると、芽亜里、奏太、莉亜、芽琉、神威、美紅利がいた。

「薫様。お茶会はもう始まっていますよ。」

「うふふ。薫お兄ちゃんはお寝坊さんだね。」

「薫お兄ちゃんは遅刻だね。」

僕には何が何なのか分からなかった。

「君たちは死んだんじゃないのかかったのかい。」

「はい。僕たちは死んでいます。」

「ここは私達死者も存在できる場所です。」

さらに訳が分からなくなった。

そうやって頭を悩ませていると、突然みんなが頭を下げ始めた。すると、何処からともなく銀色の蝶が飛んで来て集まり、黒月の魔女クロノエルの姿を作り出した。

「ご機嫌麗しゅう。クロノエル様。」

「すまなかつたわね。使用人の出番がほとんど無くて。」

「まったくですよ。一言も喋らなかつた使用人はみんな泣いてますよ。」

「それなら、後で謝りに行かなければいけないわね。」

どうしてみんな普通に話しているのだろうか。目の前にいるのは魔女で、しかも僕たちを殺した張本人だというのに。

「おや、もしかしてまだ魔女を信じていない者がいるのかしら。居るなら名乗り出なさい。」

どうやら魔女様にはお見通しのようだ。

「僕は信じられないね。あれは人間で説明できるものだつてあつたはずだ。」

「私も同意見だが、あんたと敵対する気は無いぜ。」

「俺は魔女を信じてるぜ。」

「僕はあるような殺し方は魔法しかありえないと思いますので、魔女を信じます。」

「私も神威君と同じで信じます。」

「魔女の弟子である莉亜と芽琉は魔女を完全に信じてるよ。」

みんながそう言うのと、ユウヒ・クロノエルは不気味な笑みを浮かべてこちらを見つめてきた。

「信じぬ者が居ると魔法は完成しない。奏太、神威、美紅利、3人は姿を消しなさい。莉亜、芽琉、2人は準備を手伝いなさい。芽亜里は観戦してなさい。」

みんなは再び頭を下げた。

「かしこまりました。」

「莉亜と芽琉は先に行ってるね。」

「それじゃあ、私はゆつくりと観戦させていただきますよ。」

みんなはこの部屋から姿を消した。

「そして、魔女を信じぬ愚か者の薫よ。1つゲームをしようでは無いか。」

「ゲーム？ 一体そんなことをして何になると言うんだ。」

「うつつふ。そちらが勝てば生きて現実世界のお屋敷から逃がしてやろう。しかし、私が勝てば貴様は我に屈して魔女を認める。ただそれだけよ。」

なぜユウヒがこんなことをするのか意味がわからない。確かにユウヒにもメリットがあるが、なぜそれをゲームでしようとするのか。僕にチャンスを与えてから落とす作戦だろうか。だが、チャンスは貰っておくべきだろう。

「そちらの言うゲームを受けようじゃ無いか。」

「きやははは！ 私が勝って魔女を認めさせてやる。」

「僕が勝って生きて帰らせてもらうよ。」

ここから悪夢が始まることなど、誰にも知ることは出来なかつた。永遠の悪夢は始まりを告げた。